



緒川地域松之草には、徳川光圀が訪れたという紙漉場の跡が残っています。

### ◆光圀の人柄がうかがえる逸話

市内松之草、「風車の弥七の墓」すぐそばに「松之草紙漉場跡」の碑が建ち、傍らには有志の方によって作られた紙漉き道具の小さな展示館「和紙資料館」があります。

江戸時代前半、二代藩主光圀は、水戸藩の侍女たちが紙を浪費するのを常々歎いていました。そこで、冬の寒い日、松之草村の小瀬沢川に侍女たちを遣わし冷たい水で紙を漉く農民の姿を見せ、その苦勞を教え紙を大切に使うように諭した、と言わ

れています。このことは水戸藩士立原翠軒の編による「西山遺聞」などの史料に残っており、これをもとに明治三十三（一九〇〇）年発行の尋常小学校の国語の教科書、大正八（一九一九）年発行の修身の教科書にも採用されました。

紙漉きは農閑期に行なわれ、また寒い時期に漉いた紙が良質であったので、冬場に盛んに漉かれました。冷えた手を温めるのに使われた「手あぶり」という道具も和紙資料館で見ることが出来ます。寒い時期の過酷な紙漉きの仕事も主に女性の手で行なわれていたようです。

現在でも手漉き和紙の生産は技術と経験が必要とされる大変な仕事です。その苦勞を知っていれば一片の紙も無駄にはできません。

### ◀紙漉場跡に建てられた和紙資料館（市内松之草）



### ◆紙漉き道具の行方

現在の山方、美和、緒川、御前山地域では古くから和紙生産が行なわれ、江戸時代以降は西ノ内紙の産地として多くの家で紙が漉きだされてきました。

昭和三十年代頃まで農間余業として紙漉きを行なっていた家もあり、紙漉きを使う槽、簀、桁などの紙漉きの道具や、楮を白皮に加工する際の道具を所持するお宅もあるようです。紙漉場跡に建てられている和紙資料館にはそのようにして寄贈された紙漉き道具や原料となる楮や三楮が展示されています。

現在、当地域は原料の栽培、加工から紙漉きまでの工程をすべて現地で行なうことのできる日本で唯一の地域となっています。

当市北部と大子町で生産される楮はなぜか古くから那須楮と呼ばれ、最高の品質の楮として知られています。国の重要無形文化財である岐阜県の本美濃紙の原料として指定されるなど品質の高さを物語っています。一方で、原料の那須楮の栽培や白皮への加工を行なっている農家は高齢化や後継者の不足といった切実な問題を抱えています。

紙漉きを使う道具についても当地域では製造、修繕のできる職人が途絶え、他地域での仕事に頼らざるを

得ない状況です。歴史ある西ノ内紙を後世に伝えていくためにも、紙漉きの道具の保全を早急に進めなければなりません。資料館では、西ノ内紙の姿を歴史的にとどめるため、聞き取り調査や資料収集など種々の調査を進めています。紙漉きについてご存知のことや、お持ちの史資料がございましたら、資料館（☎521450）までお知らせください。よう、ご協力をお願いします。

（歴史民俗資料館）



▶紙漉場跡を流れる小瀬沢川